

柳川郷土研究会
会誌「水郷」付録

すいきょう

瓦版

発行所 柳川郷土研究会

柳川市本城町 113-1

发行人 武松 豊

編集責任者 金子俊彦



をはかそ命つこ亡つ顔譜よあら度娘も娘八おつ 土竜(もぐら)の囁き

祈再。のなのときた色のうる一のがらに方母て手着の片て丸で化中心
つび幸後ら間も二。が食一兄面体尋つ因手さい立る腕が住く親戚たは一
てこ福どばにで十困よ事とは吹格ねた果をんるてもや燃ま
いんでん七かき歳つく、いき、て。を尽族娘もの腿えいを知
るなあな三彼な前たなそつ氣出顔き私含くできなと積人哀
。酷れ人才女か後のりれたのも色たのめしあんく無ケ
いと生くはつのは縦で。毒のは。生て万つを恥いで無は
時念をら居た男着ももそだが青栄家家策た見を時イドんた
代じ送いな。手る横彼れかあ白養にかつ。か忍代ドのは
がつつだく冬でもも女からつく不もらき食けんだと。トタ
こつたとなにはのおはら置た栄足小出るべたでか作き焼
な、で思つなどでおめ毎い。養で学てと、物。電らつて娘彈を受けた
(土い)一あうたりう、きき日て家失四六行、の苦車、の長調年年つ遂た勞に隠いさん
こ方ろが。す両くめがあ長調年年つ遂た勞に隠いさん
ことでう、存いる親なき甘げでか程のてにめは乗すた。
終戦の年、梅雨の頃大牟田市
空軍による焼夷弾攻撃をうけた
中心部は一夜にして焼け野原とな
った。瓦礫は積み重なり、瓦礫の上
に積み重なる瓦礫となってしまった。
このようにして、瓦礫の上に瓦礫が
積み重なる状況が、この「土竜の
囁き」と呼ばれる由来となっている。